

東京大学大学院情報学環附属社会情報研究センター高度アーカイブ化事業 共同研究会&記念シンポジウム
「研究者資料のアーカイブズ ― 知の遺産 その継承に向けて―」

(二〇一二年一月二六日 東京大学本郷キャンパス 福武ホール)

【基調講演】

「草稿資料の整理・保存・供用をめぐる諸問題 ―東京女子大学丸山文庫の経験から―」

“Issues in the cataloguing, preservation, and public use of manuscripts:

The experience of the Maruyama Collection, TWCU”

東京大学／帝京大学 平石直昭

要約 丸山眞男が遺した蔵書や草稿資料類は東京女子大学（以下女子大という）に寄贈され、同大図書館の丸山眞男文庫に収蔵されている。以下では同文庫の草稿資料類（手沢本や書翰等を含む）の整理と保存、供用をめぐる私たちが直面した諸問題と対応の模索過程について報告する。

1. 丸山文庫の意義と目的…日本には近代文学の研究館や作家の記念館はあるが、人文社会科学分野の研究者の記念館や研究館はないと

思われる。著名な学者の蔵書・草稿なども分散してしまうのが通例である。そうした中で学者個人の思想や学問形成の過程を初期から辿りうる資料が一括して遺されている点に、丸山文庫の貴重な価値がある。
以上のような文庫の収蔵資料の特徴と関連して、文庫は大きく二つの目的をもっている。

①丸山が遺した蔵書を公開し教師学生市民の利用に供すること（これは彼の強い希望であった）、②彼の遺した草稿資料類（手沢本や

書翰類を含む）を整理保存し、一般の利用に供することで、戦後日本の代表的な知識人である丸山の学問と思想の理解に資し、それを通じて二〇世紀日本の知性史の理解に寄与することである（これは寄贈をうけた女子大関係者と整理等に協力した研究者に共通の願いといえる）。丸山文庫は大きく開架図書と閉架図書・資料の二種から成るが、それはこの目的設定と関わる。

2. 丸山文庫関連業務と運営と組織・丸山文庫の管理運営は当初同大図書館におかれた丸山文庫準備委員会があたっていたが、現在はそれを発展させた形で、同大比較文化研究所の附属施設である丸山眞男記念比較思想研究センターがあたっている。

文庫は女子大の図書館階に置かれており、その配架や保存業務、閲覧への対応には図書館職員があたっている。しかし文庫には関連業務として、文庫の記念講演会、読書会、授業科目の提供（市民にも公開）、センター報の発行などがあり、その業務は図書館職員の守備範囲外である。それらの事務は同大教育研究支援課があたっていた。現在はセンターの非常勤職員があたっている。

センターに協力する形で、丸山眞男に直接間接に学んだ研究者からなる「丸山文庫協力の会」（現在九名）が活動している（一名が文庫顧問を委嘱されている）。他に二名が女子大から給与を受けて会の活動を支えている（女子大関係部局との連絡調整、公開準備のための定期的なミーティングの準備と記録の作成、草稿資料類の目録

入力、公開を決定した資料の走査など、その業務は多方面に及ぶ）。このように女子大内外の関係者の緊密な連携によって維持されている点に丸山文庫の特徴がある。

3. 図書雑誌類の整理・丸山の蔵書類は一九九九年春から女子大図書館に漸次搬送され、雑誌図書に関しては、図書館員による努力の成果として二年間で基本的な整理が終わり、二〇〇一年春に受贈記録として仮目録『丸山眞男文庫寄贈図書資料目録』が作られて丸山家に贈られた。関係者にも配布されている。これらのうち手沢本・貴重本以外の図書は二〇〇五年四月から開架図書として公開されている（寄贈総数の約七割、約二二〇〇冊）。配架は通例の主題別ではなく、丸山が自宅書庫でとっていた配列を生かす形をとっている。

他方丸山が書きこみや線引き、折りこみなどを行った書物については、その保存と公開の方法をめぐり二〇〇四年から、図書館員と協力の会による検討や調査が始まった。①書き込みが丸山によるものか否か、筆跡鑑定を要する場合がある。②原物の劣化を防ぐための方法をどうするかの判断（マイクロフィルムにするかPDF資料とするか）。③デジタル資料による供用が望ましいとして、それにはどれ位経費が必要か、その概算をえるために対象本を選定する必要がある。④関連して書きこみや傍線の頻度、またその内容の質的な重要性に関してグレードを付す必要が生じた。

手沢本に関しては、図書が丸山家にある段階で関係者が調査して

おり、それをふまえて図書館員によってリストが作成された。それを使って二〇〇四年秋から一名がグレード1から4までを判別する作業をし、その結果をふまえてグレード2以上のもの（約二三〇〇冊）の走査を業者に依頼した（走査対象となったのは約六四四〇〇枚）。

しかし走査箇所と同定を業者に委ねたため、商品の納入後に走査された画像と原本とを照合してみると、予想以上にミスが多いことが分かった（走査すべき箇所の見落としなど）。このため改めて手沢本全部について原本と画像とを照合する必要が生じ、多くのメンバーが手分けしてこの作業にあたった。一頁ずつ開いて画像と照合する必要があり、膨大な時間を要した。この成果として、殆どの手沢箇所はPDF化された画像として供用する準備ができた（以上の経過に関する報告として「丸山文庫資料の整理・公開―二〇〇五年四月以降の進展と展望」『センター報告』第二号、二〇〇七年三月、および「丸山文庫資料の整理・公開―二〇〇五年四月以降の進展と展望」第四号、第五号合併号、二〇一〇年三月を参照）。

また雑誌への丸山の手沢箇所についても一名がその同定の任にあたり、それをふまえて電子資料化のための走査が行われている。

さらに丸山によって殆ど毎頁に書きこみがなされている『文明論之概略』（岩波文庫版）については、セロファンテープの剥離と補修、アーカイヴァル容器への封入という方法で保存を図ることとした（東大経済学部図書室の小島氏の助言に感謝します）。

4. 草稿資料類の整理・協力の会のメンバーにより、九九年の秋から図書館の丸山文庫室で、草稿資料類の調査が手分けして始められた。約三万頁と見つもられた多種多様な資料である。自筆の日記類、草稿類、テープ起し原稿、読書ノート、学生時代の受講ノート、史料抜粋集、彼自身の講義ノート類、研究会での筆録など。しかもこうした資料類には来簡や丸山の書翰の下書き、図書雑誌なども混じっていた。丸山宛の多くの抜刷類もあった（後になるが二〇〇四年八月には、丸山家に保管されていた丸山宛の来簡類（段ボール二二箱）も文庫に寄贈された。また吉野源三郎の整理による平和問題談話会の一次資料が岩波書店から寄贈され、それも文庫室に収蔵された）。これらの多種多様な草稿資料類を一般の利用に供するためには、事前の整理と分類が必要であり、そのためには、丸山の著述に親しみ、彼の思想や学問の形成史に通じた者が当たる必要があった。

調査を始める前に、調査票の書式が決められ、多くの場合、大型封筒に仮番号を付された形で入っている資料について、その資料の題目、執筆年代の推定、丸山の既刊著述との関係、分量、内容、資料の価値の高さなどを調査して書きこむという作業をしていった。

丸山家から運びこまれた段階で、草稿資料類は約一〇七〇まで仮番号が付されていたが、中には段ボール一箱で一番号をもつような資料もあり、最終的には一三〇〇点位まで番号が増えた。この調査は前後四年を要して、二〇〇三年秋ようやく終了した。時間がかった理由の一つには、調査自体の困難さという内在的な要因以外

に、メンバーの多くが当時五〇代半ばで、勤務先大学の管理運営に中心的な役割を担い、このため文庫の作業に時間を割けないという事情があった（以上第一段階）。

これで草稿資料類にどのようなものが含まれているかは明らかになかった。しかし実際にこれらの資料類を一般の利用に供するには、検索用の目録が必要であり、そのためには上記の調査をふまえて、各資料を適当な項目に分類してゆく作業が必要となった。これには既存のモデルがなく、丸山が遺した草稿資料類に即して新たに分類項目を立てる必要があった。このため調査票全体を見わたして整理票・分類票を新たに作成し、第一段階で作成した調査票に基づいて各資料を分類し、それを整理票・分類票に記入していった。この作業を進めるためにメンバー拡大の必要が痛感され、会に二人の研究者に加わってもらい、さらに二人の若手研究者の協力を仰いだ。結果として二年後の二〇〇五年秋に、この作業を一応終えることができた。図書館員一名が、整理票の大部分にあたる約千件の基礎データの入力にあたった。

ただこの目録作りのための分類作業は数名が分担して行ったため、個別の資料をどの項目に分類するかという点で不統一が生じている恐れがあった。そこで二〇〇四年九月から一名が、他のメンバーによる整理票・分類票への記入を原物と照合しつつ点検する作業を始め、二年を経て二〇〇六年八月にその作業を終了した。この作業と併行して、資料の劣化を防ぐ目的で、各資料を中性紙の封筒

に入れるという作業も若手の協力をえて終えることができた（以上第二段階）。

以上の資料整理をふまえて公開の準備作業に入った。この作業過程でまた幾つかの問題にぶつかった。①利用者の便宜を考慮して、二項目以上に重複してリストアップされている資料を一項目にしほることとし、その改訂作業を行う必要。②当初は冊子体の形で目録を作ることを想定していたが、予想される業務量の膨大さからデジタル資料としてパソコン上に漸次登録してゆく道をとることとした。すると資料タイトルをより簡潔なものにする必要が生じた。③資料の入った封筒には、丸山が付したタイトルや、女子大搬入以前に関係者が付したタイトルをもつものなどがあった。しかし封筒の中身を正確に反映していないものがあり、それをそのまま公開用のタイトルとすれば利用者に不便をかけることになる。このため中身とタイトルとを一致させる作業を行う必要があった。④デジタル資料で供用することになるが、そのためには膨大な草稿資料類の中から、どの資料をデジタル化するかを判別し、また走査する作業が必要である。

こうした作業を経て、二〇〇九年七月に閉架資料の部分公開を開始した（草稿ノート類の一部と閉架図書二〇冊の複製本で、総数は約三千点）。公開にあたり丸山文庫のホームページを開設し（<http://office.twcu.ac.jp/facilities/maruyama/bunko/index.html>）、ノート草稿類用OPACの運用を始めた。閲覧方法や公開資料について

は、このホームページによって見て頂きたい。

現在は定期的なミーティングの際に上記の③や④の判別作業を行い、その検討結果をふまえて、実務担当者が走査の作業を行っている。

他に、書きこみのある楽譜の調査には女子大の研究者がこの二年間ほど従っており、終了に近づいている。また丸山への来簡類の整理が開始されている。

以上、事実関係の認識で不正確な点があること、また重要な論点で洩れているものがあることを恐れるが、それは報告の際に補足し訂正するにしたい。
(二〇一一年一月一四日記)

東京大学大学院情報学環附属社会情報研究センター「研究者資料のアーカイブズ ― 知の遺産 その継承に向けて ― 予稿集」(二〇一一年)より転載